

台湾でつくられた劇映画『セデック・バレ』がおもしろい。二部作からなり、入場料も二作品ぶん、上映時間も計四時間半なので、観る側にも覚悟が要る。わたしは、連休のまる一日を渋谷での映画鑑賞に当て、期待は裏切られなかった。

大阪の長年の友人・景山理は、かつては写真植字業を営みながら『映画新聞』を主催し、いまは映画館「シネ・ヌーヴォ」の代表をつとめている。彼から隔月で上映プログラムと近況報告が送られてくる。そのレポートには、しばしば劇場経営の厳しさが綴られる。近年ではデジタル上映の話題

が多い。フィルムに光を当てる映写機から、データをプロジェクターで投影する方式への急激な変化である。ほとんどの新作がデジタルで供給されつつあ

り、名画座での再上映もプロジェクターにならざるをえない。つまり、ふたとおりの上映設備が必要になるわけで、各地での名画座閉館はデジタル上映の動きと無関係ではない。

景山レポートにめずらしく勢いのよい文章が載っている。「5月はもの凄い映画からスタートを切っております。……10年に一度の衝撃作……日本では上映出来ない、そんな声を他所に、昨年（2012年）の大阪アジア映画祭でプレミア上映したところ、入り切れないお客様が続出、場内はどよめきと熱狂、

熱い興奮に包まれ、「観客賞」を受賞した超話題作……」。それが『セデック・バレ』（真の人）だった。

「霧社事件」と聞くと、できごとの概要を思いだすひとも多いだろう。本作は、日本統治下の台湾で1930年に起きた台湾原住民族による叛乱、霧社事件を正面から描くのだが、乾いた標本のように歴史を扱うのではなく、高砂族や高山族とも呼称されてきた先住民の、焼畑農業と狩猟とによって自然と共棲してきたプライドをスクリーンに躍動させる。

## 問題は連続する

日清戦争で敗れた清国が日本に割譲した1895年以降、台湾では、日本による苛烈な植民地化がすすむ。先住の人びとが、伐採した木材を山林から平地にまで運ばされる場面がある。一般の下層労働者の十分の一という低賃金もさることながら、生活の場であった森林の破壊は彼らの矜持を切りさいなんどいく。統治された35年間の不満が、民族融和の象徴「運動会への襲撃」となって霧社事件は始まる。終盤の、男女老幼の区別のない集団自決のシーンが胸を打つ。

民俗学者に転身するまでは農業政策官僚だった柳田國男は、この台湾統治を学習したのちに日韓併合に深く関与した、との指摘がある。「土地は未来の子孫から預かっている」にすぎず、私有するとの観念のない先住民から、土地を収奪する。台湾でのその先例にならい、つぎに韓半島を統治していく。村井紀は「平地人」と対立する概念である「山人」は間違いなく外部から、つまり『台湾山人』（高砂族）また『朝鮮山人』（火田民）から見いだされ、その「山人」を日本の先住民として幻視することで外部を隠蔽してしまう。「民俗学」の特質は、絶えずそのような「政治」を隠しているところにある」と指摘する（『新版 南島イデオロギーの発生』岩波現代文庫、2004年）。

こうした台湾と日本民俗学を連続させる、言い替えれば文学と政治との重層を読む視点を、山城むつみの批評集『連続する問題』（幻戯書房、2013年）は教えてくれる。その書名は、中野重治のエッセイ「連続する問題」にちなむ。では、中野においてなにが「連続する問題」だったのか。山城は、日本国憲法が、だと言う。（すずき・ひとし／ブック・デザイナー。題字デザインも筆者）

連載エッセイ 第35回

鈴木一誌